

学長 インタビュー

和歌山大学
やまもと けんじ 山本 健 学長

地域をフィールドに学生を育て 地域の苦悩を共有しながら貢献する

和歌山大学は昭和二十四年（一九四九）五月、和歌山師範学校（男子部、女子部）、和歌山青年師範学校および和歌山経済専門学校を前身とする新制大学として設置されました。学芸学部（現教育学部）と経済学部の二学部で発足し、平成七年（一九九五）にはシステム工学部、平成二十年（二〇〇八）四月には観光学部を開設して現在四学部からなる県下唯一の国立大学法人として発展しています。今回のインタビューでは、和歌山大学のこれからのテーマをお話を伺いました。

第一期の反省を踏まえて行動宣言

和歌山大学のこれからのテーマについて
お考えを伺います。

学長 本学では昨年四月から第二期中期目標、中期計画に基づいて事業を展開していますが、第一期の反省を踏まえてこの一月に今年から三年間の行動宣言をしました。全学を率いていくために七つのテーマに凝縮しています。

七つのテーマは大きく言えば二つになりませんが、一つは地域というフィールドを生かして学生を社会に通用する一人前の人間にして

送り出すということです。

受験生向け大学案内には「生涯あなたの人生を応援します」というコピーを記しています。「生涯」というところに力を入れてメッセージを送っていますが、二つの意味があります。

“生涯”の一つの意味は、学生たちが入学までに生きてきた十八年という意味です。今の学生たちは人間としての成長という点ではかなり未経験・未形成のところがあります。学生のせいでも親のせいでもありませんが、厳

しさを増す社会で生きていく上では高いハードルがあります。

あるいは学生たちはこれまでの十八年間でかなりの挫折を経験して激しく消耗していることもあり、学生の間ではこれまでの十八年間をそのまま受け入れ、しっかりと受け止めようということになります。

もう一つは、今は就職後三年間で三〇％が離職するということが普通に言われるような厳しい時代です。学生が的確な進路選択を行うことを支援するとともに、やり直したいと思ったときに大学にリターンしてやり直すことを支援していくということになります。つまり、卒業後の生涯です。この二つの意味で学生の生涯を支援していくことを大学の経営の方針にするということが一つです。

それから、本学は中規模の地方国立大学であり、教員は二八三人いて、それぞれバラエティーのある研究をしています。各教員の自主性を尊重しながら和歌山という地域における存在感を理解してもらえようという地域に



山本 健慈 学長

昭和23年 8月29日生まれ
 昭和47年 3月 京都大学教育学部卒業
 49年 3月 同 大学院教育学研究科(修士課程)修了
 52年 3月 同 大学院教育学研究科(博士課程)単位取得退学
 昭和52年 4月 和歌山大学教育学部助手
 53年 4月 同 講師
 56年 4月 同 助教授
 平成 7年 4月 同 教授
 10年 4月 同 生涯学習教育研究センター教授
 同 生涯学習教育センター長
 16年 4月 国立大学法人和歌山大学生涯学習研究センター教授
 同 生涯学習教育研究センター長
 同 評議員
 19年 4月 同 副学長
 19年10月 同 サテライト部長
 20年 4月 同 教育学部教授
 21年 5月 同 副学長
 21年 8月 同 学長

2011～2013行動宣言に関しては、「和歌山大学 行動宣言」で検索

貢献していく必要があります。ただ、私は長年フィールドで研究してきましたので、これまでの大学のアプローチに迷惑している地域がたくさんあることを知っています。

私が教員に伝えているメッセージは、地域に貢献するということは地域の苦悩を共有することだということです。地域の苦悩を共有し、自分の研究の意味を自ら確認して、地域の人々とともにつくり出す研究を重視しましょうということですよ。

行動宣言のテーマは大きく言えば、この二つになります。つまり、地域をフィールドにして学生を育てる、そして、地域の苦悩を共有しながら地域の発展に貢献する、研究するということです。

これが本学の第二期中期目標、中期計画期間中の、かつ私の在任期間中の、大きなテーマであると考えています。

学生の“生涯”を支援する

——学生を生涯にわたって支援するというのは大変ではありませんか。

学長 新人の教職員の研修で、学生の生涯を支援するという話をしたところ、学生の面倒をずっと見るなんて無茶だという意見も出ましたが、そうではありません。大切なのは、われわれの仕事が学生の生涯にとって意味があるかどうかをしっかりと考えてから、アプローチするということです。実際にわれわれが一つ一つの問題に取り組み中で、学生の生涯に貢献するというスタンスで仕事をしていこうということですよ。

——高等教育機関は学生のそれまでの人生と最後の人生のいわば結節点だと思っています。

言い換えれば、人間の成長するプロセスと、社会というフィールドで活躍することの結節点です。ですから、教職員には大学というところは、まずそういう機関だという自覚を持つてほしいと思っています。もちろん、社会にも持ってほしい。大学はそういう頼りがいのあるところだというのがわれわれの基本的なメッセージです。

サテライトを拠点に地域貢献

——地域貢献をしていくにあたって、和歌山は山も多くて半島ですから、決して交通の便がいいとは言えませんね。

学長 本学のある和歌山市まで来てまだまだ県の入口にすぎませんからね。

県の支援もあり、五年前から県で一番大きな自治体である田辺市に南紀熊野サテライトを開設しています。そこが地域貢献の一つの拠点になっています。南紀熊野サテライトには特任の教員とコーディネーターを配置しています。彼らは夜昼もなく地域を回り、まさに地域の苦悩を大学が共有する関係を結んでくれています。また、研究にも地域にも役立つようなフォーラムやシンポジウムを企画しています。昨年末には南紀熊野サテライトの五周年記念事業を開催し、紀伊半島をめぐる

様々な研究について十数人の教員が地域住民にプレゼンテーションしました。

地域貢献のセンス

学長 印象深かったのは、システム工学部のある優秀な教員の話です。彼は、自分は地域に密着したテーマには向いてないし、論文にも業績にもならない泥臭いことはやるものかと思っていたそうです。けれども地元企業の社長に再三懇願されて心が動いた。やっぱり自分は日本人だと思ったそうです。学生を

使うわけにもいかず、必要な開発などをすべて自分でやったのですが、心が洗われていく気がしたそうです。そういうことを住民の前で率直に語りました。地域の苦悩を切実に感じて心が動くということは、すごいことだと思います。地域貢献のセンスが生まれてきているという意味で大変うれしく思いました。この教員は私のメッセージがあったからやっただけではありませんし、押し付けるつもりもないのですが、本学の地域貢献の理念を体現してくれるような一つのスタイルが生まれていて、うれしいと思っています。

学生が地域の苦悩を一緒に経験する

交通が不便な一方で都市にはないものもあると思いますがいかがですか。

学長 研究者としてフィールドワークをしていたところから、地域の方ともよく話をしていたのですが、和歌山は“一周遅れ”で先頭に立つということを言っています。都市化の波が押し寄せている時代には注目されませんが、それでも、それに行き詰ったときには、和歌山というある意味で日本の辺境の地域が、きつと大きな価値を持つことになると考えています。高野・熊野が世界遺産になったという一つの価値認識もそうだと思います。

特に和歌山に蓄積した歴史や人間関係には、今の時代に必要な若者を育てる力があると思っています。

人は密集していても気持ちには過疎になっている都市のようなフィールドとは違って、まさに苦悩する課題を抱えているからこそ、企業も住民も一生懸命に地域の発展のために努力しているフィールドがあるわけです。地域の人たちは本当に苦戦しているわけですが、その苦悩を学生と一緒に経験することに教育的価値を見出すことは地方大学の一つのモデルになると思っています。

特に、和歌山の濃厚な人間関係の中で、インターンシップや実習を経験することは本当に学生を再生させます。

例えば、本学の教育学部では教育実習のオプションでホームステイを行っています。彼らは高野山や熊野の小さな町や村の学校で、

地域のおじいさん、おばあさんの家に泊めてもらいながら、二週間教育実習をします。

そこでは、まず地域の歓迎会から始まり、学校に通う道すがら地域の人たちがみんな声を掛けてくれるわけです。そういうことは都会で暮らしていた学生には初めての経験です。彼らは「日本語の通じる留学をしたみたいだ」と言います。知らない人とこんなに親しく話す経験は人生で初めてで、それまでの自分知らない人とは話せない暗い人間だったのに、非常に明るくて開放的な人間になったという学生もいます。

われわれの世代と違って、今の学生にはそのくらいカルチャーショックを受ける経験になるわけです。

実は、教育実習でホームステイを経験した学生の方が教員合格率は高いのです。聞いてみると、「こうした地域の学校の教師になりたい」という気持ちがあるのが具体的に湧きあがってくるそうです。

一つ一つのトラブルをきちんと教訓化する

学生のこれまでの十八年を受け止めて、地域とともに生涯にわたって応援するという画期的なお話を伺いましたが、在学中の学生支援について特にメンタルヘルスの相談体制を伺います。

学長 様々な挫折を経験して引きこもりになったり、メンタルの病気を抱えたりしている学生も数%います。そうした学生について

は幸い本学には宮西照夫教授という精神科医がいて、もう三十年間、ご自分の研究を生かして学生を支援しています。特に宮西先生の開発した引きこもりからの脱出プログラムは日本で一番優れていると言われています。引きこもっていた学生を、一人一人支援して社会に送り出しています。

私自身も子育て支援の研究に取り組む中で、今の学生は引きこもりの学生と同じような課題をたくさん抱えていることが分かっています。したので、学生のこれまでの十八年間を受け止めて支援していくというメッセージを出し

大学で身に付けるべき「就業力」とは何か

——文科省の平成二十二年度「大学生の就業力育成支援事業」に採択されていますが、学生の就職支援についてはいかがですか。

学長 ご存じの通り学生の就職が大変な状況ですので、本学でもキャリア支援室を設けて支援しています。ただ、大学で身に付ける就業力については、もう一度しっかりと考える必要があるのではないかと考えています。先日、一部上場企業の社長を務めた友人から、大学は就業力ということを言っているが、就業力を何と考えているのかと言われました。彼はかなりリストラをやってきた人です。もちろん一人一人の従業員の面倒を見てきたから業績も上がり社長にまでなったのですが、第一線をリタイアしてしみじみと言うのは、

たわけです。

大学の組織としては、教育学生支援機構をつくり、学生の一つ一つのトラブルがなぜ起こったのかということ現場からきちんと分析して研究し、どうすればいいのかという方策を立てて学内で共有する仕組みを設けました。

そういうことが共有されていないかぎり、同じ過ちを繰り返してしまいます。トラブルが起きたら、それを教訓化して、多くの学生の支援に行きわたるようなマネジメントをしましょうということです。

労働組合をはじめ自分のやり方を厳しく批判

教養教育は大学教育で今一番重要なこと

——和歌山大学の特色ある教育と研究についてお伺いします。教養教育の取り組みについてはいかがですか。

学長 今の就業力の話とつながるのですが、専門教育 (the art of being a professional) とともに、人間になるための教育 (the art of being a human)、つまり教養教育が不可欠だと考えています。

学生に自分自身の幸せを実現するための力量を身に付けてもらうことが教養教育だと思います。

するカウンターパートナーがいたからこそ、人生を誤らなくて済んだということです。経営者のやりたい放題だったら、後悔するようなことをしていたかもしれない。だから、学生を就職させるのはいいけれど、学生にいつかというとき自分の身を守る方法についてもきちんと教えているのかと言うのです。

大学では「就業力」とか「社会人基礎力」など様々な言い方をしていますが、大学がどういう人間を育てるのかというときに、やはり「自分の幸せ」を実現できる学生を育てる必要があると思います。

——大学の就業力育成支援事業では、就業力とは何かということ、あるいはそのために大学の教育は何ができるのかということを本質から検討することが根本的なテーマだと思っています。

——和歌山大学の特色ある教育と研究についてお伺いします。教養教育の取り組みについてはいかがですか。

学長 今の就業力の話とつながるのですが、専門教育 (the art of being a professional) とともに、人間になるための教育 (the art of being a human)、つまり教養教育が不可欠だと考えています。

学生に自分自身の幸せを実現するための力量を身に付けてもらうことが教養教育だと思います。

来年度からの取り組みですが、異文化異世界体験学習プログラムというものを準備しています。学生に日本語だけでなく英語も通じない留学の体験をさせるプログラムです。特に日本よりも生活の困難な地域で様々な人々の苦勞を目の前で見て、そこで問題解決のために働いている人たちがいる場所を考えています。学生に日本の中だけでは経験できないような学びをしてもらい、教養教育の改革の一つの柱にしたいと思っています。

地域づくりに貢献したい 学生が集まる

——二〇〇八年に設置された観光学部について伺います。この四月には大学院も設置されるということですね。

学長 観光学部は成熟した日本社会の産業や生活スタイルの未来を考える上で、重要な学部だと思っています。観光というと旅行のイメージがありますが、観光学部の地域再生学科では、観光の拠点となる地域そのものの価値や価値ある地域を再発見し、あるいははつくり出すという、観光の基になる地域づくりが一つの中心になっています。

学生も全国から集まっています。特徴的なのは、観光産業に勤めたいという学生ももちろんいますが、それと同じくらい地元で地域づくりに貢献したいという学生がいることです。

この三月に初めて卒業生を送り出しますが、就職率はほぼ一〇〇%で観光業界をはじめ、

自治体や故郷の旅行産業などに就職が決まっています。

大学院もこの四月に設置し、世界遺産登録にも関与されている西村幸夫東京大学教授に

留学生にどんなメッセージを送るのか

——国際交流について伺います。

学長 本学にも例えば主に中国から留学生がきています。留学生がくる理由は様々ですが、国際交流については、まず、われわれの方で留学生をどう受け止めて、どういう人材として育ててもらいたいかという理念をはっきりさせる必要があるのではないかと思っています。単に広がればいいとか、数が多ければいいという問題ではなくて、われわれが国際交流において何を望むか、あるいは留学生にどんなメッセージを送るかということをしっかり持つ必要があるかと思っています。その戦略を練っているところです。

地域の課題と 大学の情報を結ぶ

——産学連携の取り組みや地域の生涯学習支援について伺います。

学長 産学連携については外部資金の獲得ということもありますが、地域の大学にとって重要なのは、地域の産業とどう結びつくかだと思います。また、生涯学習についても地域の切実な課題に大学の情報をいかにフィッ

も客員教授としてきていただきます。国立大唯一の観光学部に対応しく、高いレベルの地域づくりのプロデューサーたちを育てる大学院にしていきたいと思っています。

ティングさせるかということが根幹の問題です。地域の問題に誰かが気付いて、気付いている人と大学が結びついて、地域の求めに応じながら大学の財産を提供する、あるいは大学の研究をつくり出すという関係を重視した取り組みを行っています。

平成二十二年七月に、産学連携・社会連携活動を総括する運営支援組織として地域創造支援機構を設置し、地域共同研究センターを産学連携・研究支援センターに名称変更、生涯学習教育研究センターを地域連携・生涯学習センターに名称変更しています。

教職員が自分の大学の 価値をしっかりと確認する

——広報活動について伺います。

学長 広報には専門の職員を採用しました。いろいろな考え方があって、単に知らせるだけの広報でなく、参加してもらえる広報、コミュニケーションが生まれる広報が必要ではないかと考えています。

それから広報で重要なのは、大学内部の教職員が自分の大学の価値についてしっかり認

識することです。世間で話題になっているからということではなくて、われわれ自身が価値を認識して、それを世間に知ってほしいという形が重要です。そのために本学の優れた活動などを全学の教職員が共有するようにしています。それが広報のあり方で一番重視している点です。

大学の情報を経済界に発信

——関西経済同友会から理事を迎えたことについて伺います。

学長 経済界にも大学を理解してもらいたいということがあり、関西経済同友会など経

済界で活躍されている帯野久美子氏に非常勤理事としてきてもらいました。これまでの大学と経済界の関係というのは、とすれば勝手な片思いで注文をしたり、あるいはお互いに避けていたりしていたのではないかと思います。

帯野氏は国際的な事業をしている方ですが、大学を理解するという意味でも本学の仕事を手伝ってくれませんかとお願いました。経済界の情報を本学に入れていただくだけでなく、大学の情報を経済界に発信していただきたいと思っています。特に大学の情報を経済界に発信するチャンネルを強化したいと思っています。

多くの人に依存しながら信頼されるメッセージを出す

——学長のリーダーシップと経営マインドについて先生のお考えを伺います。

学長 私は学長個人の力量や見識には限界があって、常に自分を支えてくれたり、補充してくれたりする者がいないと、説得力のある指針は出せないと思っています。多くの人たちに依存しながら信頼されるメッセージを発するということが学長のリーダーシップかなと思っています。

どういう人から学長を出すか

学長 それから、国立大学法人は学長兼理

事長ですが、今の国立大学法人法のままでいくとすると、大学の経営者である学長兼理事長、つまり「職業としての学長」を、どういう人から出していくのかというのは切実なテーマなのではないかと思っています。

私自身はずっと大学の研究者として仕事をしてきたわけですが、自分が本学のように八〇億円もの予算を運用する事業体の経営者に相応しい経営の能力があるのかどうかということとは常に疑問を持っていますし、そもそも事業体を経営することと、研究者のような非常に個性的なメンバーで構成される集団を率いるということの間にはある種の矛盾がある

と思っています。

つまり、研究者が学長である場合は、研究者のことや研究のことはよくわかるかもしれないけど、経営はよくわからない。一方で経営に長けた方が学長になる場合は、研究者の特殊性がよくわからない。どちらがなってもいいと思いますが、やはり研究者以外から大学の経営者が生まれるとすれば、研究とは何か、大学とは何か、研究者はどういう個性の人たちかということを深く理解した人でなければ上手くいかないだろうと思います。その意味で、日本の大学は誰が経営すべきなのか、模索の時期にあるのかもしれないと思っています。

研究者の人生から考えると深刻な問題

学長 また、例えば大企業の重役になる方というのは、そのための訓練をしてきて、それがその方の人生でもあるわけです。しかし、大学の理事になる教員は、理事の任期を終えた二年後ぐらいには再び研究者に戻らなくてはなりません。つまり、理事の仕事ばかりやって二年後に研究者として使いものにならなくなっていたら、彼らの生涯は大変なことになります。

大学の経営者構成というのは、それぞれの研究者の人生から考えれば本当に深刻な問題だと思っています。私および本学の実践は「職業としての学長」「職業としての理事」のモデルの開発でもあると思います。